

『本朝麗藻』の分類意識

佐伯 雅子

1.はじめに

『本朝麗藻』は、平安中期に編纂された漢詩集で、起家の詩人の詩集という性格を有している。類書や『千載佳句』に比べて独特の分類方法で行っている。また同時代の『江吏部集』や『和漢朗詠集』とも異なる分類であるが、平安中期の特徴という点で共通する部分もある。そこで、本稿では『本朝麗藻』の分類意識についての特徴的な性格を述べておこうと思う。

『本朝麗藻』の分類を考える際に最初に注意しなければならないのは、本文の問題である。『本朝麗藻』は零本で、上巻残欠部と下巻が別々に伝流し、群書類従に至って初めて統合された経緯がある。だが、下巻が校訂された近世の写本しか現存してしていないのに対して、上巻は鎌倉時代の写本であるので、その資料価値は高い。本稿では、そうした性格を持つ『本朝麗藻』の伝本の性格を勘案しながら、まず目録分類、本文分類の『本朝麗藻』の本文の性格を見ることから始めたいと思う。

そして、『藝文類聚』『初学記』『千載佳句』『江吏部集』『和漢朗詠集』『本朝文粹』詩序の分類項目を大分類と下位の細目分類との比較を上巻・下巻とを別々に行い、その分類比較を通して『本朝麗藻』の分類方法の特質について明らかにしていきたい。

2.『本朝麗藻』の分類

最初に『本朝麗藻』の目録に掲げられた分類を示しておく。上巻は巻首と巻尾を欠くので、目録分類には掲げられていない。下巻に関しては次のとおりである。¹⁾

雑題部

山水 仏事付仏事僧侶 神祇 山莊 閑居 帝徳 法令 書籍付勤学 賢人 讃徳 詩 酒 贈答
餞送 懐旧 述懐

群書類従本にはこの目録がない。静嘉堂文庫本には割注の「仏事」がない。東北大学狩野文庫本には割注の「勤学」が「勤字」となっている。「詩」と「酒」が一つになって、「詩酒」としている諸本は、国会図書館所蔵鵜軒文庫本・内閣文庫所蔵和学講談所旧蔵本・京都大学所蔵近衛文庫本・京都大学図書館所蔵菊亭文庫本・陽明文庫本・神宮文庫所蔵林崎文庫本・慶應義塾大学斯道文庫所蔵本・神宮文庫所蔵宮崎文庫本・実践女子大学山岸文庫所蔵九条家旧蔵本・実践女子大学所蔵菅原在家本・佐藤道生氏所蔵本・東北大学所蔵狩野文庫本・国会図書館所蔵森氏旧蔵本である。これらは、誤写の可能性が高いが、本文分類を見ると、目録分類と一致していないために生じたためと思われるものや、分類を整理するために意図的になされた可能性もあるので、本文での分類を次に示しておく必要があると思う。本文分類は上巻にも残っているので、上巻のものも掲げる。

(上巻) 夏 秋

(下巻) 山水部 仏事部 神祇部 山莊部 閑居部 帝徳部 法令部 書籍部付勤学 勤学部 賢人部
讃徳部 詩部 酒部 贈答部 餞送部 懐旧部 述懐部

*1 大曾根章介・佐伯雅子共編『校本本朝麗藻附索引』一九九二年。汲古書院刊。

分類自体の問題は後述するが、下巻の本文分類ではそれぞれに「部」がつけられていることが、目録分類との大きな違いである。そして、鎌倉時代の写本である上巻の本文分類には「部」がつけられていないのである。下巻でも「部」がつけられていない諸本が存在するが、それは部分的なものである。それは、「勤学」と「懐旧」のみで、「部」がつけられていない写本は、「勤学」では、内閣文庫所蔵和学講談所旧蔵本・京都大学所蔵近衛文庫本・京都大学図書館所蔵菊亭文庫本・陽明文庫本・神宮文庫所蔵林崎文庫本・慶應義塾大学斯道文庫所蔵本・神宮文庫所蔵宮崎文庫本・実践女子大学山岸文庫所蔵九条家旧蔵本・実践女子大学所蔵菅原在家本・佐藤道生氏所蔵本・東北大学所蔵狩野文庫本。国会図書館所蔵森氏旧蔵本である。「懐旧」では、京都大学図書館所蔵菊亭文庫本・陽明文庫本・神宮文庫所蔵林崎文庫本・慶應義塾大学斯道文庫所蔵本・神宮文庫所蔵宮崎文庫本・実践女子大学山岸文庫所蔵九条家旧蔵本であり、他の分類では「部」がつけられているので、書写上のミスであろう。『本朝麗藻』の本文分類は基本的には「部」がつけられているのである。即ち、『本朝麗藻』下巻の本文分類の「部」は、現存最古の写本である尊経閣文庫所蔵茶表紙本か、或いはそれ以前に校訂整理されたものの痕跡であるといえるのである。

次に、各分類の目録分類と本文分類の比較を行う。「仏事」は目録分類では「付仏事僧侶」とあるが、本文分類では「仏事部」のみ存在し、「僧侶」の分類は立てられていない。77「秋夜対月憶入道尚書禪公」の前が「僧侶」の分類の該当部分と考えられるが、現存写本には特に立てられていない。

「勤学」「勤学部」として106「冬日於飛香舍聽第一皇子始誦御注孝經應教詩一首」の前に、静嘉堂文庫本・群書類従本には本文分類を立てていない。むしろ分類を立てていない方が少数派で、群書類従の普及により、それが一般化したものと思われ、「勤学」は存在していたと考える方が妥当であろう。

「詩」「酒」に関しては、本文分類では、東北大学所蔵狩野文庫本のみ「詩酒部」とするが、「酒部」も諸本と同じように立てている。東北大学所蔵狩野文庫本は、目録分類に従ったもので、他の諸本は親本に従うか、東北大学所蔵狩野文庫本を修正している。「詩部」とあるべきであろう。先に示したこの目録分類では、内閣文庫所蔵和学講談所旧蔵本系統の多くの写本が「詩酒」を採用している。書写上のミスと考えるのがまず妥当と思われるが、この二つの分類を除き、『本朝麗藻』の分類は全部二字の分類である。二字分類へのこだわりが書写者にあったかも知れない。

『本朝麗藻』の諸本は、近世漢学者によって、校訂・整理されたものである。これらの一見些細な誤写に見える本文の綻びから、『本朝麗藻』の分類意識が見え隠れするのである。

3.『本朝麗藻』の構成と類書の大分類

次に『本朝麗藻』と各書の大分類を比較してみたい。表 I に『藝文類聚』『初学記』『千載佳句』『江吏部集』『和漢朗詠集』『本朝文粹』との大分類の比較表を掲げた。『本朝麗藻』とほぼ一致する分類に下線を施した。大分類のみを比較すると、仏教を扱っている『藝文類聚』の「内典部」・『初学記』の「道釈部」・『千載佳句』の「釈氏部」・『江吏部集』の「釈教部」、神道を扱った『江吏部集』の「神道部」・『本朝文粹』の「聖廟」、及び『本朝文粹』の「祖餞附蕃客餞別」が、『本朝麗藻』「仏事部」「神祇部」「餞送部」と類似しているのである。神道に関しては日本特有のものであり、特に道真関係に集中していて、日本人の作品を扱っている文献には見られる。また、「帝徳部」は『江吏部集』にも見られる。

表 I の大分類は、各書の大分類を掲げ、『本朝麗藻』の分類とほぼ一致するものに傍線を施し、『藝文類聚』とほぼ一致する分類を太字で示した。表 I の大分類を見ると、『藝文類聚』『初学記』『千載佳句』『江吏部集』『本朝文粹』には、かなり類似した分類が見られる。大分類を一覧すると、『初学記』では、類書という性格から『藝文類聚』と一致するものが多い。『藝文類聚』で「州部」「郡部」とあったものが、『初学記』では「州郡部」、また「宝玉部」が「宝器附花車」、「菓部」「木部」が「菓木部」、「虫豸」が「虫」など単純な統合整理の場合もあり、全体として一致する傾向がある。その傾向は『千載佳句』にも見られ、『藝文類聚』の「鳥部」「獣部」が「禽獣部」となって

いて、一致傾向は『初学記』の半数以下だが、類書との類似点は指摘できるだろう。『江吏部集』に至っては、「神道部」を除いて『藝文類聚』の分類にほぼ対応する。『本朝文粹』の場合も「山水」というように統合したもの、逆に「法会」・「山寺附僧房」のように仏教の分類を更に細かく立てたりして、²²「聖廟」・「和歌序」のように我が国独自のもの以外は、類書に共通する分類が多い。即ち、『本朝麗藻』以外のこれらの文献の多くは、類書の分類の影響を受けて、分類名は一致しないものの、その分類を反映させているのである。

唯一共通する仏事に関するものは、本来漢籍のものではない。『本朝麗藻』の分類の骨組みは類書の枠組みから逸脱するものであり、『千載佳句』・『江吏部集』・『本朝文粹』と比較してみても、顕著なことが理解できる。『本朝麗藻』は漢詩文集の中でも特異な分類をしているのである。

川口久雄氏は、春夏秋冬を四季部として一括されているが、川口氏の表によると、四季部と「山水部」以下の下巻の下位分類を同列に扱っておられる。²²「四季部」が存在したとしたならば、それに対応するのは下巻では「雑題部」ではないかと考えられる。上巻が「四季部」で下巻が「雑題部」であっただろう。下巻の「山水」以下の分類が上巻の「春夏秋冬」に相当するのである。

下巻は全詩が現存するのでその全貌が見えるのだが、上巻は巻首・巻尾が欠落していて、その分類は推測の域を出ないのが現状であるが、大分類のみで見ると、『本朝麗藻』は類書の枠組みを大きく逸脱していることがわかるのである。

4.失われた上巻

本節では『本朝麗藻』の上巻の分類の特徴について述べてみたい。最初の問題は、「四季部」に相当する分類が各書においてどのように扱われていたかである。『藝文類聚』『初学記』等の類書では、「天部」「歳時部」と分けて分類していて、その分類方法は、『千載佳句』の「天部」と「歳時部」、『江吏部集』の「天部」と「四時部」、『本朝文粹』の「天象」「時節」に踏襲されている。類書では、四季の分類の前に天象を扱う「天」があるのが正常であり、「天」に関する分類は『千載佳句』『江吏部集』では、四季の後に配置されているが、分類としては最初の方に扱われている。『本朝麗藻』の場合、この「天」に当たる部分が存在していなかったとまず推測する。

『本朝麗藻』下巻は「雑題部」である。それに対応するのが上巻「四季部」であると考えとするならば、構成の上では符合するのである。このような分類方法をとったものに、『和漢朗詠集』がある。『和漢朗詠集』は上巻が「春夏秋冬」・下巻が「雑」である。「天」に相当する部分は下巻に収録されている(風・雲・晴・暁)。『本朝麗藻』と『和漢朗詠集』の成立の前後関係は正確には不明であるが、この二つの作品はほぼ同時代の作品である。『本朝麗藻』所収の詩が『和漢朗詠集』にも存在するし、藤原公任の詩も『本朝麗藻』に十一首存在する。『本朝麗藻』に「天部」に該当する部分が存在していたならば、上巻の四季の中に分散配置されるか、下巻に該当する分類を立てて『和漢朗詠集』のように配置したのではないかと考えられる。

そこで、『本朝麗藻』上巻は、下巻「雑題部」に対する「四時部」「四季部」「時節部」などの「四季」の存在のみを推定するのである。『千載佳句』は大江維時、『江吏部集』は大江匡衡で維時の孫であるので、『千載佳句』のスタイルを継承したのであろう。また、『本朝文粹』詩序では文章の規範になるものを収集する作品の性格上、漢文学の正統に立った整理法になる。この点、『本朝麗藻』も『和漢朗詠集』もその形式から自由であった。彼らが起家の文士であったり、公卿であったりして、そうした制約にとらわれない新しいスタイルを作ろうとしたのであろう。

次に表Ⅱで各書の四季の分類の下位分類と『本朝麗藻』を比較した。「四季」の下位分類とは、たとえば『和漢朗詠集』の場合、春の下位に「立春」「早春」「春興」「春夜」等の分類があることである。並立分類とは、「時節」と「歳時」が並列しているもので、『藝文類聚』『初学記』にも既に存在する。これらについて、少し立ち入って見ておきた

*2川口久雄『平安朝日本漢文学史の研究 増訂版』昭和三十九年。明治書院刊。

い。「四季」に相当する分類も多くの文献が更に下位分類・並立分類を立てて、細分化しているのに対して、『本朝麗藻』は「夏」「秋」以下の下位分類は存在していないし、「四時部」―「雑題部」という構成と考えるならば、「四季」の並立分類は考えにくい。

『藝文類聚』の場合、「歳時部」は三つに分かれている。「歳時部上」は、「春」「夏」「秋」「冬」、「歳時部中」は、「元正」「人日」「正月十五日」「月晦」「寒食」「三月三」「五月五」「七月七」「七月十五」「九月九」、「歳時部下」は、「社」「伏」「熱」「寒」「臘」「律」「曆」となっている。『初学記』は、「歳時部上」は、「春」「夏」「秋」「冬」、「歳時部下」は、「元日」「人日」「正月十五日」「月晦」「寒食」「三月三日」「五月五日」「七月七日」「七月十五日」「九月九日」「冬至」「臘」「歳除」となって、『藝文類聚』をやや簡略化しているが、年中行事についての項目を別に立てて、単なる「春夏秋冬」と並列させているのである。このあり方は『千載佳句』にも踏襲されている。『千載佳句』「四時部」では「立春」「早春」「春興」「春暁」「春夜」「暮春」として、「時節部」では、「寒食」「三月三日」として年中行事は別に分類されている。これに対して、『江吏部集』では「四時部」の中にそれらが一括して組み込まれている。下位項目については、『江吏部集』の群書類従本では目録分類には存在しているが、本文分類はなされていない。『和漢朗詠集』では、四季に相当する部分と時節に相当する部分が時系列に配列され、季節が終わったところで、天象・動植物が時系列に配列されている。類書や『千載佳句』ならば、天象に関するものは「天象」、動植物なら「鳥部」「獣部」「虫部」「木部」「草部」と分類されるところである。「四季」の中に時系列のものと動植物を並列して配列しているが、「四季」と「時節」の並列分類ではない。『本朝文粹』でも「四時」と「時節」は分けられていない。『本朝麗藻』の場合、「三月三日」「七月七日」に相当する詩(序) 1「三月三日侍宴同賦間柳發紅桃応製」・50「七夕佳会風為使」51「牛女秋意」52「七夕於秘書閣同賦織女雲為衣応製」はそれぞれ「春」に相当する部分、「秋」に入れられているが、「四時」と「時節」は区別されていない。『本朝麗藻』の場合、『和漢朗詠集』より更に進んで天象や動植物も時系列の中に組み込んだものと考えられる。四季の時系列に沿った形での範疇で趣向を凝らして配列している構造である。この構造は漢詩集のものというよりは勅撰和歌集のそれに近い。

平安中期になると、『本朝麗藻』や『和漢朗詠集』は、類書や『千載佳句』の枠組みを一方では採用しながらも、分類の立て方は独自のものになっているようである。「天」部の有無、「四季」と「雑」との対応構造、「四季」と「歳時」の統合、「四季」の下位分類の廃止、これらは当時の漢詩・漢文集にも少なからず見られるものだが、これらを網羅するのが『本朝麗藻』なのである。その意味でも『本朝麗藻』の四季の分類は、過渡的な性格の平安中期の特徴を代表するものだったといえるのである。

5.『本朝麗藻』下巻と各書の下位分類

次に『本朝麗藻』の下巻の分類の特徴について述べてみたい。下巻の「雑題部」とは、上巻の「四季」の分類に属さない「雑」のものである。「雑題部」は、「四季」以外のものの総合として位置づけられる。

表Ⅲは、各文献の下位分類と『本朝麗藻』との対比表である。『藝文類聚』『初学記』『千載佳句』は、分量が多いので、今回扱うものの中で、『本朝麗藻』と類似する下位分類があるものに限った。そのうち『本朝麗藻』に重なるものは太字で示した。

『千載佳句』の「地理部」に「山水」があり、『和漢朗詠集』の細目にも「山水」がある。『藝文類聚』の大分類では「山部」と「水部」に分けているが、「山水」としての分類を取り合わせるのは、『千載佳句』以降である。しかし、表Ⅲのように『藝文類聚』での「山部」「水部」と『千載佳句』『本朝麗藻』『和漢朗詠集』の「山水」とは扱い方が異なる。『藝文類聚』では、「山部」も「水部」も具体的な山や川の固有名詞を中心として編纂されていて、所謂「山水」という概念は、概念として存在していない。『千載佳句』の場合も、「地理部」の中での分類で詩題や詩の内容に具体的な地名が挙げられていて、『藝文類聚』の類型を踏襲している。『和漢朗詠集』も多くの詩や句や和歌に具体的な固有名詞が挙げられている。それに対して『本朝麗藻』は具体的な地名を想起させる詩が少ない。自然の景物としての意味の「山水」に近い意味がある。それぞれの詩題やその内容や作品配列は次の問題になるので、本稿では作品に

まで深く立ち入らないが、『本朝麗藻』は最初の「山水」で、特異な分類を立てているようである。

次の「仏事付仏事僧侶」は、先述したように今回資料に挙げた文献と一致する傾向が強いものである。大分類でも類似していたところである。下位分類では、『本朝麗藻』目録には「仏事付僧」とあるが、『初学記』「道釈」の「僧」、『千載佳句』の「釈氏」の「禅僧」「老僧」などが類似する。だが、仏事や僧に関するものは漢籍本来のものではない。百科全書的な編纂なので入れられたものである。このような傾向は次の「神祇」にも見られるが、中国の文献及びそれを編纂した『千載佳句』には当然それに直接重なるものはない。『江吏部集』では「神道部」は「祠廟」のみである。『和漢朗詠集』は「仙家付道師隠倫」があるが、『藝文類聚』「靈異部」・『初学記』「道釈部」・『千載佳句』「仙道部」の様式を受けたものとも思われる。

「山荘」は、『千載佳句』「居処」に「山館」の下位分類がある。また『江吏部集』「居処部」にも「山居」がある。だが、この下位分類に類似したものは『藝文類聚』「初学記」の「居処」には見られない。(表Ⅲ参照)『千載佳句』にその先蹤があるにしても、『本朝麗藻』は独自に分類を立てているのである。

「閑居」「賢人」「讃徳」「贈答」「餞送」「懐旧」「述懐」は、他文献の「人部」「人事部」「人倫部」の細目に重なる分類である。(表Ⅲ参照)「閑居」は『千載佳句』の「人事部」に見られるものだが、『本朝麗藻』では独立した分類を立てている。「賢人」は、『藝文類聚』「人部」・『初学記』「人部」・『江吏部集』「人倫部」の「賢」が該当する。「讃徳」も『藝文類聚』「人部」の「徳」に該当する。「贈答」は『藝文類聚』「人部」・『江吏部集』「人倫部」にも存在する。「餞送」は、『千載佳句』の「別離部」の「餞別」、『江吏部集』の「人倫部」の「餞別」、『和漢朗詠集』の「餞別」にほぼ分類される。ここで「別離部」を立てた『千載佳句』の独自の分類に注目したい。類書の形式をそのまま引き継いだものではないのである。「懐旧」は、『藝文類聚』「人部」・『千載佳句』「人事部」の「憶旧」(『千載佳句』の本文分類では「憶旧」ではなく、「懐旧」になっている。)・『和漢朗詠集』の「懐旧」に一致する。「述懐」は、『江吏部集』の「人倫部」・『和漢朗詠集』に「述懐」がある。

これらの例を見ると、他の文献で「人部」「人事部」「人倫部」の下位分類として取り上げられたものが、『本朝麗藻』では、独立した一つの分類として大きく取り上げられていることがわかる。人間性の重視というのが『本朝麗藻』の分類の一つの特徴であったといえるであろう。

「詩」「書籍付勤学」については、『藝文類聚』「雑文部」に「詩」があり、「書籍」には一致するといえないものの「文章」のような類似の項目が「雑文部」見られる。『初学記』「文部」の下位分類には「文章」はあるが、「詩」はない。また『千載佳句』「人事部」の「文藻」もそれに近い。『江吏部集』では「文部」に「教学」と「詩」がある。『和漢朗詠集』にも「文詞付遺文」がある。これらも下位分類で別々になっているが、『藝文類聚』「雑文部」「文部」の中に含まれるものである。(表Ⅲ参照)『本朝麗藻』では、「詩」と「書籍」を意識的に分けているのである。作詩と学問を分離させて扱っているところも特徴的である。

「酒」に関しても独立した分類を立てている。『藝文類聚』では「食物部」、『初学記』では更に大分類されて「器物部」に分類され、『江吏部集』でも「飲食部」になっているが、事実上『江吏部集』では「飲食部」は「酒」のみである。一方『千載佳句』では「宴喜部」に分類されている。事物として飲食物に分類にするか、宴に分類にするかで、「酒」に対する意識が『千載佳句』と『江吏部集』でも相違している。『千載佳句』は宴における「酒」を重視したようである。『本朝麗藻』は、それより更に進んだ形で独立した分類をしているのである。「酒」に対する関心の高さと考えられる。

『本朝麗藻』下巻と各書の細目分類を比較してみると、所謂「自然」の重視、日本独自の変容、人間の重視、作詩と学問の分離、酒に対する思い入れがある。下巻はまさに「雑題部」にふさわしい世界だったのである。

6.おわりに

『本朝麗藻』の分類は、四季題部と「雑題部」に二別される。これは、『和漢朗詠集』の分類と同じである。上巻が四季題部であったと推定され、四季と行事に関する時節は類書などのように区別されることもなく、天象や鳥獣や虫や草木も含みこみ、時系列に並べたものであったと考えられる。この四季の分類と配列は勅撰と歌集に近いものが

ある。一方下巻は「雑題部」であるが、この分類で最も重視されたものは人間であったと思う。また、それは同時に「詩」や「酒」に独立性を持たせることであったといえよう。

『本朝麗藻』は起家の詩人の詩集である。固定化した文章道への挑戦ともいえる性格を持つ詩集である。固定化した枠組みからの脱却ということが、『本朝麗藻』の分類にも窺え、これが平安中期の漢詩文の大きな特徴であったといえよう。

【資料】

【表 I】大分類表

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集	本朝文粹
欠 (春)	天部	天部	四時部	天部	春	天象
夏	歲時部	歲時部	時節部	四時部	夏	時節
秋	地部	地部	天象部	地部	秋	山水
(冬)	州部	州郡部	地理部	居処部	冬	帝道
雜題部 山水	郡部	帝王部	人事部	神道部	雜	人倫
仙事 付仙事僧侶	山部	中宮部	宮省部	釈教部		人事
神祇	水部	儲宮部	居処部	帝徳部		祖 餞附 蕃 客 餞別
山莊	符命部	帝戚部	草木部	人倫部		論文
閑居	帝王部	職官部	禽獸部	文部		居処
帝徳	后妃部	礼部	宴喜部	音楽部		別業
法令	儲宮部	案部	遊放部	飲食部		布帛
書籍 付勤学	人部	人部	別離部	火部		灯火
賢人	礼部	政理部	隱逸部	木部		聖廟
讚徳	案部	文部	釈氏部	草部		法会
詩	職官部	武部	仙道部	鳥部		山寺附僧 房
酒	封爵部	道釈部				木
贈答	治政部	居処部				草
餞送	刑法部	器物部				鳥
懐旧	雜文部	宝器部 花 車附				和歌序
述懐	武部	果木部				
	軍器部	獸部				
	居処部	鳥部				
	産業部	鱗介部				
	衣冠部	虫部				
	儀飾部					
	服飾部					

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集	本朝文粹
	舟車部					
	食物部					
	雜器物部					
	巧藝部					
	方術部					
	內典部					
	靈異部					
	火部					
	藥香草部					
	草部					
	宝玉部					
	百穀部					
	布帛部					
	菓部					
	木部					
	鳥部					
	獸部					
	鱗介部					
	虫豸部					
	祥瑞部					
	災異部					

[表Ⅱ]四季部・時節部の細目

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集
(春)	春(歳時上)	春(歳時上)	立春(四時)	早春	立春(春)
夏	夏(歳時上)	夏(歳時上)	早春(四時)	三月三日	早春(春)
秋	秋(歳時上)	秋(歳時上)	春興(四時)	暮春	春興(春)
(冬)	冬(歳時上)	冬(歳時上)	春暁(四時)	避暑	春夜(春)
	元正(歳時中)	元日(歳時下)	春夜(四時)	七夕	子日付若菜(春)
	人日(歳時中)	人日(歳時下)	暮春(四時)	雜秋	三月三日(春)
	正月十五日(歳時中)	正月十五日(歳時下)	送春(四時)	九月尽	暮春(春)
	月晦(歳時中)	月晦(歳時下)	首夏(四時)	雜冬	三月尽(春)
	寒食(歳時中)	寒食(歳時下)	夏興(四時)	除夜	閏三月(春)
	三月三(歳時中)	三月三日(歳時下)	夏夜(四時)		鶯(春)
	五月五(歳時中)	五月五日(歳時下)	苦熱(四時)		霞(春)
	七月七(歳時中)	伏日(歳時下)	避暑(四時)		雨(春)
	七月十五(歳時中)	七月七日(歳時下)	納涼(四時)		梅付紅梅(春)
	九月九(歳時中)	七月十五日(歳時下)	晩夏(四時)		柳(春)
	社(歳時下)	九月九日(歳時下)	立秋(四時)		花付落花(春)
	伏(歳時下)	冬至(歳時下)	早秋(四時)		躑躅(春)
	熱(歳時下)	臘(歳時下)	秋興(四時)		藤(春)
	臘(歳時下)	歳除(歳時下)	秋夜(四時)		款冬(春)
	律(歳時下)		暮秋(四時)		更衣(夏)
	曆(歳時下)		初冬(四時)		首夏(夏)
			冬興(四時)		夏夜(夏)
			冬至(四時)		端午(夏)
			冬夜(四時)		納涼(夏)
			歳暮(四時)		晩夏(夏)
			元日(時節)		花橘(夏)
			寒食(時節)		蓮(夏)
			三月三日(時節)		郭公(夏)

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集
			七夕(時節)		螢(夏)
			八月十五夜(時節)		蟬(夏)
			重陽(時節)		立秋(秋)
					早秋(秋)
					七夕(秋)
					秋興(秋)
					秋晚(秋)
					秋夜(秋)
					八月十五夜付月(秋)
					九日付菊(秋)
					九月尽(秋)
					女郎花(秋)
					萩(秋)
					蘭(秋)
					槿(秋)
					前栽(秋)
					紅葉付落葉(秋)
					雁付歸雁(秋)
					虫(秋)
					鹿(秋)
					露(秋)
					霧(秋)
					擣衣(秋)
					初冬(冬)
					冬夜(冬)
					歲暮(冬)
					炉火(冬)
					霜(冬)
					氷付春氷(冬)
					雪(冬)
					霰(冬)
					仏名(冬)

[表Ⅲ] 雑の下位分類。該当部分のみ。

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集
山水	総載山(山)	総載地(地)	山水(地理)	月付月露(天)	風
仏事付仏事 僧侶	崑崙山(山)	総載山(地)	山中(地理)	風(天)	雲
神祇	嵩高山(山)	泰山(地)	泉(地理)	雲(天)	晴
山荘	峯山(山)	衡山(地)	瀑布泉(地理)	雨(天)	暁
閑居	衡山(山)	峯山(地)	春水(地理)	雪(天)	松
帝徳	廬山(山)	恒山(地)	丞相(人事)	山(地)	竹
法令	太行山(山)	嵩高山(地)	尚書(人事)	原(地)	草
書籍付勤学	荆山(山)	終南山(地)	近臣(人事)	野(地)	鶴
賢人	鍾山(山)	石丸(地)	将軍(人事)	林(地)	猿
讃徳	北邙山(山)	総載水(地)	従軍(人事)	海(地)	管絃付舞妓
詩	天台山(山)	海(地)	刺史(人事)	江(地)	文詞付遣文
酒	首陽山(山)	河(地)	県令(人事)	池(地)	酒
贈答	燕然山(山)	江(地)	才士(人事)	氷(地)	山
餞送	羅浮山(山)	淮(地)	幼智(人事)	泉(地)	山水
懐旧	九疑山(山)	済(地)	才藝(人事)	水(地)	水付漁父
述懐	虎丘山(山)	洛水(地)	文藻(人事)	水樹(地)	禁中
	蒜山(山)	渭水(地)	褒美(人事)	院(居処)	故京
	石帆山(山)	涇水(地)	草書(人事)	池臺(居処)	故宮付故宅
	石鼓山(山)	湖(地)	図画(人事)	林亭(居処)	仙家付道師隠倫
	石門山(山)	漢水(地)	及第(人事)	山居(居処)	山家
	太平山(山)	驪山湯(地)	慶賀(人事)	田家(居処)	田家
	岷山(山)	氷(地)	感恩(人事)	橋(居処)	隣家
	会稽諸山(山)	井(地)	謝恩(人事)	祠廟(神道)	山寺
	交広諸山(山)	橋(地)	兄弟(人事)	仏(釈教)	仏事
	総載水(水)	関(地)	憶兄弟(人事)	經(釈教)	僧
	海水(水)	聖(人)	外孫(人事)	寺(釈教)	閑居
	河水(水)	賢(人)	朋友(人事)	僧(釈教)	眺望
	江水(水)	忠(人)	文友(人事)	願文(釈教)	餞別

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集
	淮水(水)	孝(人)	憶友(人事)	帝德(帝德)	行旅
	漢水(水)	友悌(人)	書信(人事)	賢(人倫)	庚申
	洛水(水)	恭敬(人)	遇友(人事)	王昭君(人倫)	帝王付法皇
	壑(水)	聰敏(人)	不遇友(人事)	慶賀(人倫)	親王付王孫
	四瀆(水)	師(人)	憶遇友(人事)	贈答(人倫)	丞相付執政
	濤(水)	交友(人)	訪問(人事)	述懷(人倫)	將軍
	泉(水)	諷諫(人)	經過(人事)	餞別(人倫)	刺史
	湖(水)	貴(人)	招客(人事)	行旅(人倫)	詠史
	陂(水)	富(人)	留友(人事)	獵(人倫)	王昭君
	池(水)	貧(人)	留宿(人事)	尚書(文)	妓女
	谿(水)	離別(人)	美女(人事)	毛詩(文)	老人
	谷(水)	美丈夫(人)	艷情(人事)	礼記(文)	交友
	澗(水)	美婦人(人)	王昭君(人事)	左伝(文)	懷旧
	浦(水)	醜人(人)	閨怨(人事)	孝經(文)	述懷
	渠(水)	長人(人)	閑居(人事)	論語(文)	慶賀
	井(水)	短人(人)	閑意(人事)	教学(文)	祝
	氷(水)	奴婢(人)	閑放(人事)	詩(文)	恋
	津(水)	經典(文)	閑適(人事)	琴酒(音樂)	無常
	橋(水)	史伝(文)	閑興(人事)	酒(飲食)	白
	頭(人)	文字(文)	閑遊(人事)	燈(火)	
	目(人)	講論(文)	閑官(人事)	草木(木)	
	耳(人)	文章(文)	閑散(人事)	樹(木)	
	口(人)	筆(文)	自詠(人事)	桃(木)	
	舌(人)	紙(文)	詩興(人事)	花付落花花鳥 (木)	
	髮(人)	硯(文)	寓興(人事)	紅葉付落葉 (木)	
	髑髏(人)	墨(文)	感興(人事)	蘭(草)	
	胆(人)	道(道釈)	感歎(人事)	菊(草)	
	美婦人(人)	僊(道釈)	懷旧(人事)	草花(草)	
	賢婦人(人)	道士(道釈)	老(人事)	鳥(鳥)	

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集
	老(人)	觀(道釈)	老人(人事)	鶯(鳥)	
	言語(人)	仏(道釈)	老病(人事)	雁(鳥)	
	謳謡(人)	菩薩(道釈)	居宅(居処)	燕雀(鳥)	
	吟(人)	僧(道釈)	隣家(居処)		
	嘯(人)	寺(道釈)	旧宅(居処)		
	笑(人)	都邑(居処)	亭(居処)		
	聖(人)	城郭(居処)	林亭(居処)		
	賢(人)	宮(居処)	水亭(居処)		
	忠(人)	殿(居処)	亭楼(居処)		
	孝(人)	楼(居処)	水楼(居処)		
	徳(人)	臺(居処)	水閣(居処)		
	讓(人)	堂(居処)	山館(居処)		
	智(人)	宅(居処)	池(居処)		
	性命(人)	庫蔵(居処)	秋池(居処)		
	友悌(人)	門(居処)	泛舟(居処)		
	交友(人)	牆壁(居処)	水石(居処)		
	絶交(人)	苑圃(居処)	渠(居処)		
	公平(人)	園圃(居処)	橋(居処)		
	品藻(人)	道路(居処)	勝境(居処)		
	質文(人)	市(居処)	隣境(居処)		
	鑑誠(人)	漏刻(器物)	公宴(宴喜)		
	諷(人)	帷幕(器物)	宴会(宴喜)		
	諫(人)	屏風(器物)	春宴(宴喜)		
	説(人)	簾(器物)	夏宴(宴喜)		
	嘲戯(人)	牀(器物)	夜宴(宴喜)		
	言志(人)	席(器物)	逃夜宴(宴喜)		
	行旅(人)	扇(器物)	庚申(宴喜)		
	遊覧(人)	香鑪(器物)	宴後(宴喜)		
	別(人)	鏡(器物)	宴楽(宴喜)		
	怨(人)	銀臺(器物)	妓楽(宴喜)		

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集
	贈答(人)	舟(器物)	歌妓(宴喜)		
	閨情(人)	車(器物)	蹈歌(宴喜)		
	寵幸(人)	燈(器物)	舞妓(宴喜)		
	遊俠(人)	燭(器物)	歌(宴喜)		
	報恩(人)	煙(器物)	歌舞(宴喜)		
	報讐(人)	火(器物)	琴(宴喜)		
	盟(人)	冠(器物)	琴酒(宴喜)		
	懷旧(人)	弁(器物)	琴書(宴喜)		
	哀傷(人)	印(器物)	琴茶(宴喜)		
	妬(人)	綬(器物)	箏(宴喜)		
	淫(人)	笏(器物)	琵琶(宴喜)		
	愁(人)	佩(器物)	笙(宴喜)		
	泣(人)	履(器物)	簫(宴喜)		
	貧(人)	裘(器物)	笛(宴喜)		
	奴(人)	衫(器物)	管絃(宴喜)		
	婢(人)	裙(器物)	樂曲(宴喜)		
	傭保(人)	酒(器物)	酒(宴喜)		
	隱逸(人)	飯(器物)	詩酒(宴喜)		
	經典(雜文)	粥(器物)	飲宴(宴喜)		
	談講(雜文)	肉(器物)	會飲(宴喜)		
	讀書(雜文)	羹(器物)	勸酒(宴喜)		
	史伝(雜文)	脯(器物)	醉(宴喜)		
	集序(雜文)	餅(器物)	春醉(宴喜)		
	詩(雜文)		留醉(宴喜)		
	賦(雜文)		醉鄉(宴喜)		
	七(雜文)		茶(宴喜)		
	連珠(雜文)		茶酒(宴喜)		
	書(雜文)		氷(宴喜)		
	檄(雜文)		厨膳(宴喜)		
	移(雜文)		別意(別離)		

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集
	紙(雜文)		送別(別離)		
	筆(雜文)		別使君(別離)		
	硯(雜文)		餞別(別離)		
	総載居処(居処)		宴別(別離)		
	宮(居処)		春別(別離)		
	闕(居処)		秋別(別離)		
	臺(居処)		留別(別離)		
	殿(居処)		別後(別離)		
	坊(居処)		行旅(別離)		
	門(居処)		水行(別離)		
	樓(居処)		曉行(別離)		
	櫓(居処)		旅情(別離)		
	觀(居処)		思隱(隱逸)		
	堂(居処)		隱士(隱逸)		
	城(居処)		徵隱士(隱逸)		
	館(居処)		憶旧隱(隱逸)		
	宅舎(居処)		卜山(隱逸)		
	庭(居処)		山居(隱逸)		
	壇(居処)		別山居(隱逸)		
	室(居処)		郊居(隱逸)		
	斎(居処)		幽居(隱逸)		
	廬(居処)		寺(釈氏)		
	道路(居処)		禪居(釈氏)		
	食(食物)		僧房(釈氏)		
	餅(食物)		禪僧(釈氏)		
	肉(食物)		老僧(釈氏)		
	脯(食物)		贈僧(釈氏)		
	醬(食物)		禪觀(釈氏)		
	酢(食物)		仙人(仙道)		
	酪蘇(食物)		仙境(仙道)		

本朝麗藻	藝文類聚	初学記	千載佳句	江吏部集	和漢朗詠集
	米(食物)		道士(仙道)		
	酒(食物)		道觀(仙道)		
	内典(内典)		山人(仙道)		
	寺碑(内典)				
	仙道(靈異)				
	神(靈異)				
	夢(靈異)				
	魂魄(靈異)				